

飛鳥寺の発願と造営集団

大橋 一章

はじめに

- 一、飛鳥寺の発願縁起
 - 二、飛鳥寺発願以前の寺と僧尼
 - 三、発願の真相
 - 四、造寺工の技術の習得
 - 五、飛鳥寺造営集団
むすび
- 註

はじめに

わが国初の本格的な伽藍の寺院として建立された飛鳥寺は、現在創建当初のものとしては鞍作鳥がつくったという丈六の金銅釈迦像のこるだけとなっている。しかし、昭和三十一・二年の発掘調査によって、それまで誰も想像できなかった一塔三金堂という大伽藍の寺院であったことが判明した。

私もこの飛鳥寺の発掘調査と先学の研究に導かれて、飛鳥寺の造

営経過と三金堂に安置されていたであろう仏像について小論を発表したことがあるが、如何なる人たちによって造営されたのかという問題については言及しなかった。換言すれば、かつて日本人の誰一人見たことのないなかつた彩色鮮やかな巨大木造建築の仏教建築や、金色燦然と輝やく丈六の金銅仏を一体どのような工人がつくったのかという問題である。もちろん未知の建築や仏像を日本人だけでつくることはできない。おそらく仏教をわが国に伝えた半島の百済がわが国の仏教興隆を期待して協力したものと思われる。

そこでわが国第一号の本格伽藍の飛鳥寺をつくった造営集団がどのような工人から組織されていたのかという問題について私見を述べ、あわせて飛鳥寺が発願されるに至った経緯についても検討してみたい。

一、飛鳥寺の発願縁起

飛鳥寺の発願の経緯については『日本書紀』と『元興寺伽藍縁起

并流記資財帳」（以下『元興寺縁起』）がそれぞれ記していて、両者ともに用明天皇二年・丁未の年（五八七）を發願年とするが、發願縁起として記すものは両者異なる。

『日本書記』崇峻天皇即位前紀（用明二・五八七）には、その年の四月に用明天皇が崩御したあと、皇位繼承をめぐって蘇我馬子大臣と物部守屋大連が対立したことが記されている。七月になると、馬子は諸皇子や群臣たちと守屋を討たんとして軍兵を河内の淡河にすめるが、そのとき麿戸皇子、のちの聖徳太子は戦勝祈願をし、勝利を得たなら必ず四天王寺を建てることを誓った。また馬子も「凡そ諸天王・大神王等、我を助け衛りて、利益つことを獲しめたまはば、願はくは當に諸天と大神王との奉為に、寺塔を起立てて、三宝を流つたへむ」と、誓を發たてた。やがて守屋を誅し、乱平定後撰津国に四天王寺をつくり、馬子も本願のままに飛鳥の地に法興寺、すなわち飛鳥寺を起てたという。

このように、『日本書記』によると飛鳥寺は馬子が用明二年に皇位繼承をめぐって守屋と戦ったとき、戦勝祈願としてそれも四天王寺と同時に發願建立されたように記されている。

ところが、『元興寺縁起』の記す飛鳥寺の發願縁起は前記の『日本書記』のものとはまったく異なる。

然不久之間、丁未年百濟客來、官問言、此三尼等、欲度百濟國受戒、是事応云何耶。時藩客答曰、尼等受戒法者、尼寺之内、先請十尼師、受本戒已、即詣法師寺請十法師、

先尼師十廿師所受本戒也、然此國者、但有尼寺、無法師寺及僧、尼等若為如法者、設法師寺、請百濟國之僧尼等、可令受戒。白。時池辺天皇以命、大々王与馬屋門皇子二柱語告宣、法師寺可作処見定告。時百濟客白、我等國者、法師寺尼寺之間、鐘声互聞、其間無難事、半月々々日中之前、往還処作也。時聰耳皇子馬古大臣俱起寺処見定。丁未年、時百濟客還本國。時池辺天皇告宣、將欲弘聞佛法故、欲法師等并造寺工人等、我有病故、急速宜送也。然使者未來問、天皇崩已。

ここに三尼とあるのはわが国初の尼僧となつた善信・禪藏・惠善の三尼のことで、彼女たちは前年の敏達十四年（五八五）の破仏のとき、都波岐市（海石榴市）で迫害をうけていたが、敏達天皇の崩御後用明天皇が即位すると、三尼は桜井道場（寺）で供養された。そのとき三尼は「伝へ聞く、出家の人、戒を以て本と為すと。しかるに戒師なし。故、百濟國に度りて戒を受けむと欲りす」と白したという。このあと前掲の記述がつづくのである。

すなわち、丁未の年（用明二・六八七）に百濟の客が来日した。この百濟の客に三尼が百濟に度りて受戒したい旨を伝えると、百濟の客は「尼が受戒する法は尼寺にまず十尼師を請じて本戒を受け、次に法師寺に詣りて十法師を請じ、尼師とあわせて廿師のもとにて本戒を受けなければならない。しかしながら、この國には尼寺だけがあつて、法師寺と僧がない。尼たちがもし法のごとくせんとすれ

ば、法師寺すなわち僧寺を建立し、百済から僧尼を請じて受戒せよ」と白した。用明天皇は大々王すなわち後の推古天皇と聖徳太子に、「法師寺を起てる所を見定めよ」と告りたまわった。そこで聖徳太子と馬子の二人が寺、すなわち飛鳥寺を起てる所を見定めたというのである。『元興寺縁起』は飛鳥寺をいつ発願したとは明言しないが、丁未年に百済の客が来日してその年に帰国するまでの間に飛鳥寺を起てる所を見定めたというから、丁未の年、つまり用明二年が発願の年ということになる。

このように、『日本書紀』と『元興寺縁起』の伝える飛鳥寺の発願に関する経緯や理由はまったく異なるが、発願年は両者ともに用明天皇二年の丁未年（五八七）で一致している。かつて福山敏男氏は、『日本書紀』用明二年の記事は「元興寺古縁起にこの年（丁未）⁽¹⁾ 聰耳皇子と馬子とが法師寺の寺地を見定めたとあることに照応しているが、それは遙か後世に四天王寺縁起が作られた時に造作されたことで、この戦乱の際の発願とするのは、書紀の編者の潤色ではなく、四天王寺縁起作者の構作にほかならない」と、いわれた。⁽²⁾

たしかに四天王寺の出土瓦からみても、四天王寺は飛鳥寺の次に建立された創建法隆寺よりもさらに遅れるというから、⁽³⁾ 四天王寺飛鳥寺同時発願という『日本書紀』の記事は事実ではあるまい。おそらく『日本書紀』の記す飛鳥寺が守屋討伐の戦勝祈願によって発願されたという縁起は、福山氏のいうように四天王寺縁起作者の構作なのであろう。

また福山氏は、『日本書紀』では用明二年（丁未）の守屋討伐に際して飛鳥寺発願がなされたのは、『元興寺縁起』にこの年（丁未）、聰耳皇子と馬子とが法師寺の寺地を見定めたとあることに照応しているという。つまり、『日本書紀』に記されている飛鳥寺の発願年は四天王寺縁起作者が『元興寺縁起』によって構作したというのである。先ほど私は『日本書紀』と『元興寺縁起』が記す飛鳥寺の発願年は用明二年つまり丁未の年で一致していると記したが、福山説のように、『日本書紀』の記述が『元興寺縁起』によって書かれたものであるなら、両者が一致するのは当然であろう。

もともと福山氏は、『元興寺縁起』の飛鳥寺発願縁起が信用できるものかどうかについては何等言及していない。以下、『元興寺縁起』の記す飛鳥寺の発願縁起について検討してみたい。

二、飛鳥寺発願以前の寺と僧尼

前掲の『元興寺縁起』が記す飛鳥寺建立のきっかけは、わが国初の尼僧となつた善信尼以下の三尼がわが国には戒師がいないので百済に度つて受戒したいというところから、百済の使が日本の国には尼寺はあつても僧寺と僧がないから、まず僧寺をつくつて百済の僧尼を請じて受戒するようにといったことから始まっている。百済の使者の発言によると、飛鳥寺の発願前夜にわが国でつくられていた寺は尼寺だけで、僧寺はなかったということになる。もちろん飛鳥寺以

前のわが国の寺が本格的な伽藍を擁した巨大木造建築の寺でなかったことはいうまでもないが、こうしたわが国の初期仏教の時代の寺が尼僧の住む尼寺であったという認識は注目すべきである。このことがもしも事実なら、『元興寺縁起』の飛鳥寺発願縁起は信用できることになるから、三尼が出家したころの寺と僧尼について『日本書紀』と『元興寺縁起』の記述を検討してみたい。

欽明朝に百済から仏教が公伝されたとき、公式にはわが国に僧尼はいなかった。その後『日本書紀』敏達六年（五七七）十一月条には、百済国王が日本に帰国する大別王等に経論若干巻のほか、律師・禪尼・呪禁師・造仏工・造寺工の六人を献り、彼等を難波の大別王の寺に安置はべさせたことが書かれているから、三尼が出家した當時わが国には百済から来日した四人の僧尼がいたことになる。ところが、『元興寺縁起』も『日本書紀』もともに三尼の出家は敏達六年に來日した百済の僧尼とは関係ないところでなされたごとく記している。

すなわち、『元興寺縁起』には癸卯の年つまり敏達十二年（五八三）に蘇我馬子が仏法を弘めんことを願い、出家すべき人を求めたが、応ずる者がいなかった。しかし針間国に還俗の高麗の老比丘恵便と老比丘尼法明がいて、按師首達等の女斯末売・阿野師保斯の女等已売・錦師都瓶善の女伊志売の三人が法明について仏法を受け学びて出家したことが書かれている。一方、『日本書紀』には敏達十三年（五八四）に百済将来の弥勒の石像等を請じた蘇我馬子が四方

に修行者を求め、播磨国にいた高麗の還俗僧恵便を師として司馬達等の女を出家させて善信尼とした。また善信尼の弟子二人を出家させたが、名は禪藏尼と恵善尼であったことが記されている。

三尼の出家が来日して七年ほどの百済の僧尼とは関係なく、そのころ日本に渡来していて、すでに還俗僧となっていた高麗の僧尼を求めておこなわれた経緯を明らかにすることは、今となっては不可能である。しかしながら、二つの史料を見るかぎり、三尼の出家は高麗の還俗僧と関係があったということであろう。

ところで、敏達六年に百済の僧尼と工人を安置はべさせたという大別王の寺とは一体如何なる寺だったのであろうか。残念ながら大別王なる人物は他の文献に見えず、大別王の寺も一切その実態はわからない。百済から来日した男女の僧尼を一つの寺に泊めること自体、仏教寺院ならあり得ないことで、工人までも同様に泊めていたとなると、大別王の寺はわれわれの共通認識にある仏教寺院ではなからう。大別王は今でいう外交官的な人物であったと思われるから、その外交官のオフィスのな施設を大別王の寺と称していたのではあるまいか。というのも、もともと寺という文字は漢代以来役所を指していて、有名なものに外国使臣を扱う鴻臚寺があった。そこに外国から来た仏僧を泊めていたため、寺という文字は仏教の専用語になったという⁴。外国人の上陸地である難波にあった大別王の寺はもともと外国人を泊める施設であった可能性が強い。そこに、敏達六年百済の僧尼が泊ったため、大別王の寺は寺という文字の当初とそ

の後加わった双方の意義にかなうものになりつつあったのではなからうか。

私は、この大別王の寺というものは僧尼が仏教活動をおこなう寺とはいささか趣きの異なるもので、外交官的な大別王の私的な外国人接待施設だったのではないかと考えている。であればこそ、「大別王寺」のごとく個有名を冠したのであろうし、僧も尼も、さらに工人までも泊めていたのであろう。

ところで、敏達十三年に善信尼以下の三尼が出家したあとのことを『日本書紀』は次のように記している。同じ敏達十三年に馬子は宅の東に仏殿をつくり弥勒の石像を安置して、三尼を屈請して大会設齋した。このとき鞍部達等は仏舍利を齋食の上に得て、馬子に献上した。また馬子は石川の宅に仏殿をつくった。翌敏達十四年（五八五）、馬子は大野丘の北に塔を建て、達等が献上した舍利を塔の柱頭に藏めたという。

以上はわが仏教興隆期の功労者である馬子の業績を記したもので、宅の東の仏殿は馬子をはじめてつくった仏殿だった。仏殿はいうまでもなく仏像を安置する建物で、寺院では仏塔とともに中心的な建築である。宅の東につくったのは仏殿だけのようだが、ここに百済将来の弥勒の石像を安置し、三尼を屈請して法会を催したのである。この宅の東の仏殿が寺と呼び得るものかどうかはわからないが、三尼を屈請しているところを見ると、この仏殿にはまだ僧侶はいなかったようである。もっとも、馬子が三尼を出家させたのは先述の

『日本書紀』によると、弥勒の石像を請じたことにははじまっているから、宅の東の仏殿に石像を安置したのであれば、ここを三尼が拠点としても何ら問題はない。

一方、『元興寺縁起』の記述はこの間の事情が『日本書紀』と弱干前後して同じではないが、三尼は出家すると、馬子と大々王（後の推古天皇）と池辺皇子（後の用明天皇）は歓喜し、彼女たちを桜井道場に請じて住ませたという。『元興寺縁起』には桜井道場とか桜井寺の名で登場するが、その実態となると皆目わからない。大々王の牟久原の後宮に仏像や経教を置いていて、これが庚寅年、つまり欽明三十一年（五七〇）に余臣たちから焼き討ちにあったが、かろうじて助かったらしいことが書かれている。その後壬寅の年（敏達十一年・五八二）に大々王と池辺皇子が牟久原殿を桜井に還し、癸卯の年（敏達十二年・五八三）に桜井道場として三尼を住ませた。次いで甲賀臣が弥勒の石像を将来したので、三尼は家の口かに持もってきて供養礼拝したという。

こうしてみると、『元興寺縁起』は実態のわからない桜井道場がもともと女性の宮殿から出発していて、そこに三尼たちを住ませることによって、わが国には古くから女性とかかわっていた仏殿、つまり尼寺があったことを示唆したかったかのようなのである。このことが、後にわが国には尼寺しかなくて僧寺がなかったという百済の客の発言につながるのである。

このように、私は桜井道場の存在に対しては懷疑的であるが、そ

れ以上にそこに三尼が住んでいたということには否定的である。また『元興寺縁起』は桜井道場に住んでいたはずの三尼が弥勒の石像を家の口に持っていて、供養札拝したと記すが、家の口とはいずれの家の口なのか、桜井道場に住んでいたのであれば当然その中に安置すべきはずなのに、この記述はいささか腑に落ちない。達等が舍利を得るのは『日本書紀』も『元興寺縁起』も弥勒の石像に対して大会設齋したり札拝供養しているときで一致しているところをみると、家の口に持っていて札拝供養したとする『元興寺縁起』の記述はやはり不自然ということになる。

弥勒の石像をめぐっては、『日本書紀』のように馬子がつくった宅の東の仏殿に安置されていて、そこへ出家したばかりの三尼が屈請されたというのが真相ではあるまいか。

先述のように、敏達十四年二月、馬子は大野丘の北に塔を建てたところが疫病が流行したので翌三月に破仏がおこなわれ、『日本書紀』には三月三十日に物部守屋が「自ら寺に詣りて、胡床あぐちに踞しりたげ坐まり。其の塔を斫きり倒して、火を縦つけて燔やく。并て仏像と仏殿とをを焼く」とある。大野丘の北の塔は寺と呼ばれ、そこには塔のほかにも仏殿もあったという。もちろんこの塔が後の高層建築だったとは思えないが、『元興寺縁起』はこの塔のことを塔の心柱を指す仏教建築独特の刹柱という用語で記していることからすると、この塔はたとえ小さくとも、わが国ではかつて誰も見たことのなかった意匠の建築であったと推測できよう。

『日本書紀』を見るかぎり、宅の東の仏殿や石川の宅の仏殿は仏像を安置する仏殿が一字だけだったようであるが、この大野丘の北の塔には仏殿もあって、その規模ゆえに寺と称されたのかもしれない。

しかしながら、ここで注意したいのは馬子がつくった宅の東の仏殿や石川の宅の仏殿、それに大野丘の北の塔や仏殿は敏達十三年から十四年にかけてつくられており、そのころはわが国の仏教建築の工人はいまだ建築技法の習得中であつたから、これらの仏殿や塔はいずれも小規模の建築であつたということである。ただし、これらの建築が日本人の見たことのない意匠であつたことはいうまでもない。

このような三箇所の仏教建築のうち、大野丘の北の塔だけは寺と呼ばれた可能性があるが、まだ個々の名称を冠して○○寺と呼ぶ段階ではなかつたのかもしれない。『日本書紀』の記述からすると、弥勒の石像を安置していた宅の東の仏殿に三尼が住んでいたらしいが、石川の宅の仏殿については僧尼がいたかどうかは不明である。また大野丘の北の塔は完成するや焼き討ちされているので、僧尼どころではなかつたのかもしれない。

破仏は大野丘の北の塔から人身迫害へと拡大する。『日本書紀』は「馬子宿称と、従ひて行へる法みつりの侶ひととを訶責せめて、毀やぶり辱はづかむる心を生なさしむ。乃ち佐伯造御室更の名は、於閻あま殿を遣して、馬子宿称の供いたはる善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿称、敢へて

命に違はずして、側愴たみなきき啼泣いなきちつつ、尼等を喚び出して、御室に付まく。有司つかさど、便たごに尼等の三衣を奪ひて、禁錮からめどしへて、海石榴市つばきいちの亭しりやんに楚撻ちたうちき。」と記し、『元興寺縁起』も「佐俣さへ岐き弥牟留古造みむろこぞうを遣して三尼等を召さしむ。泣なちつつ出で往く時、大臣を覲まき。三尼等を將つひて都波岐市つばきいちの長屋に至りし時、其の法衣を脱がして仏法を破滅ぶつめつりき」と記している。

二つの文献を見ても三尼が具体的にどこから海石榴市へ連行されたのかは不明だが、先ほどの私の推測が許されるなら、馬子が敏達十三年につくった宅の東の仏殿に弥勒の石像を安置し、そこに出家したばかりの三尼が屈請されて住みはじめ、翌敏達十四年の破仏で海石榴市へ連行・迫害されたと解することがもつとも自然ではあるまいか。

おそらく飛鳥寺発願前夜におけるわが国の仏施設といえるものは敏達十三年に馬子につくった宅の東の仏殿と石川の宅の仏殿、翌敏達十四年の大野丘の北の塔の三箇所があつたのであろう。そのうち大野丘の北の塔には仏殿もそなわつていて、もつとも規模が大きかつたらしく、寺とも呼ばれていた。しかし破仏のために完成するたびに破壊されてしまった。また宅の東の仏殿には三尼が屋請されたというから、私はそこに三尼が住んでいた可能性が強いことを述べてきた。そうすると、宅の東の仏殿を後世の尼寺に準ずるものと解することはできよう。他の二箇所に僧尼がいたかどうかは残念ながら不明としかいいようがない。

『元興寺縁起』によると三尼には二人の弟子がいて、あわせて五尼が戊申の年つまり崇峻元年（五八八）に百済に渡つたという。『日本書紀』には三尼以外の僧尼の出家は書かれていない。すなわち、二つの史料に書かれている出家者はいずれも女性だけで、男性はいないのである。

してみると、『元興寺縁起』の百済の使者がわが国には尼寺しかなく僧寺と僧がないから、まず僧寺をつくるように述べたという飛鳥寺の発願縁起を理由なく否定することはできない。私は飛鳥寺発願の意義は、わが国初の本格的な仏教伽藍を出現させることにあつたと考えているから、それまで尼寺しかなかったので僧寺の建立が要請されていたという『元興寺縁起』の発願縁起は大筋において信じてよいと思われる。しかし、池辺天皇（用明天皇）が大々王（推古天皇）と馬屋門皇子（聖德太子）に法師寺をつくることを見定めさせたこと記し、飛鳥寺の発願者たる馬子を無視していることは事実ではあるまい。そのあと聰耳皇子と馬古の二人が寺を起つところを見定めたと、ようやく馬子を登場させているのである。

つまり、『元興寺縁起』が仏教興隆に際して用明天皇や推古天皇、さらに聖德太子に関連づけて記している部分は事実ではなく削除すべきであろう。したがって、飛鳥寺発願縁起のわが国には尼寺しかないの僧寺をつくるようにという百済の使者の発言は認められるとしても、用明天皇の命によって後の推古天皇と聖德太子に飛鳥寺の寺地を見定めさせたという部分や、聖德太子と馬子の二人が寺地

を見定めたという部分は縁起作者の造作ということになる。

三、発願の真相

飛鳥寺の発願に関する『日本書紀』と『元興寺縁起』の記述をそのまま信ずることはできないが、すでに述べてきたように両者が一致するのは用明二年という発願年だけである。ところが福山敏男氏は、『日本書紀』に記されている発願年は『元興寺縁起』の発願年をもとに四天王寺縁起作者が構作したものという。しかしながら、『元興寺縁起』の発願年が信頼できるものかどうかについては何ら言及していないので、この用明二年という紀年から検討してみたい。先述のように、『元興寺縁起』は飛鳥寺の発願年については明言しない。しかし、丁未の年に来日した百済の使の言によって僧寺、つまり飛鳥寺をつくることになり、寺地を見定め、その後同じ丁未の年に百済の使は帰国しているから、飛鳥寺の発願年は丁未の用明二年ということになる。それではこの用明二年という年にたしかに飛鳥寺は発願されたのであろうか。

ここで注目したいのが崇峻元年（五八八）に百済からわが国に僧侶と工人が送られてきたことである。このことは『日本書紀』と『元興寺縁起』、さらに『元興寺縁起』所引の露盤銘に記されている。三者の記述はそれぞれ相違があるが、百済がわが国に僧侶と工人を送ってきたのは敏達六年（五七七）の大別王の帰国に際して送って

きて以来で、二回目となる。前回と較べると、僧侶も工人も増えているが、注意すべきは工人のうち今回は造仏工（仏師）がいないこととで、これについては後述する。

この崇峻元年の僧侶と工人の渡来は、従来飛鳥寺の建立にともなうものといわれてきた。つまり、百済から僧侶や工人が渡来してきたのはそれ以前にわが国で飛鳥寺建立の計画があった、換言すれば飛鳥寺の発願があったということで、『元興寺縁起』がいう用明二年飛鳥寺発願をあえて否定することもないのである。そればかりか、このあとの飛鳥寺の造営プログラムを示す断片的な記録が『日本書紀』と『元興寺縁起』にみえるが、それらをあわせ考えると用明二年の発願と翌年の僧侶と工人の渡来は一連の飛鳥寺造営プログラムの一コマといえるものだから、飛鳥寺の発願が用明二年ということは一積極的に評価すべきであらう。

飛鳥寺の発願を用明二年とするのは、『日本書紀』も同じであるが、先述したように福山氏は『元興寺縁起』をもとに四天王寺縁起作者が構作したものと一蹴した。しかし、『日本書紀』の記す飛鳥寺の発願縁起は『元興寺縁起』のそれとは異なり、蘇我馬子と物部守屋が対立したため、馬子が戦勝祈願をして発願したというものであった。このような『日本書紀』が記す飛鳥寺の発願縁起について、私は以下のように解している。

すなわち、馬子と守屋の対立は用明天皇がなくなつてのち、皇位継承をめぐるものであったが、馬子は穴穂部皇子を擁立する守屋を

誅し、泊瀬部皇子を立てて崇峻天皇とし、独裁的な権力を確立した。政敵の守屋を滅亡させたことで、馬子の政治に反対する勢力がなくなり、かねてよりすすめてきた仏法興隆を一挙に進展させるべく、そのシンボルたる本格伽藍の寺院、すなわち飛鳥寺を発願したのである。

馬子が政敵の守屋を倒した用明二年以前、本格伽藍の寺院はなく、馬子がつくった仏教施設として敏達十三年の宅の東の仏殿や石川の宅の仏殿、敏達十四年の大野丘の北の塔があったが、これらは本格伽藍には及ばないものだった。その上当時活躍していたのは善信尼をはじめとする三尼たちで、僧はおらず、僧寺と呼べるものはない。それ故『元興寺縁起』のいうように、僧のいる本格伽藍の建立がまたれていたことも事実で、このことも飛鳥寺発願の引き金になっていたと思われる。

私は飛鳥寺が用明二年に発願されたことは以上述べたごとくであつたと考えているが、さらに以下のことを指摘しておきたい。それは敏達六年（五七七）に渡来していた百済の工人、すなわち造寺工と造仏工のもとに弟子入りしていたであろうわが国の見習い工人たちが十年という歳月を経てやつとこのころ（用明二年・五八七）一人前の造寺工と造仏工に成長していったことである。だからこそ、馬子は本格伽藍建立のゴーサインを出すことにもなったのである。

ここで強調しておきたいのは、わが国初の本格伽藍の発願には仏

教建築に精通したわが国の工人たちの成長が必須の条件だということである。いくら百済の造寺工が来日していても、一人や二人の工人であの巨大木造建築からなる本格伽藍の寺院を建立することはできない。本格伽藍の建立には造営集団が必要となる。つまり、飛鳥寺の建立は多くの工人からなる造営集団が組織されて、はじめて可能だったのである。こうしてみると、飛鳥寺が発願されたのはまずわが国の工人たちの成長があつて、初の本格伽藍の僧寺の建立が計画され、用明二年に馬子が政敵の守屋を滅ぼし種々の障害がなくなったためと解すべきであろう。

したがって、私は『日本書紀』と『元興寺縁起』の伝える飛鳥寺の建立縁起のうち、用明二年という発願年はその前後の状況から判断するかぎり、積極的に肯定すべきだと考えている。ただし、馬子の守屋に対する戦勝祈願のためという発願理由はそのまま信用することはできず、その真相は馬子が政敵を滅ぼすことによつて、種々の障害を取り除くことができ、やがて本格伽藍の飛鳥寺を発願することにつながつたとみるべきであろう。

四、造寺工の技術の習得

飛鳥寺が発願された用明二年（五八七）について、先ほど私は敏達六年（五七七）に渡来した百済の造寺工と造仏工のもとに弟子入りしていたわが国の見習い工人たちが、やつとこのころそれぞれの

技術・技法を習得して一人前の造寺工と造仏工に成長していたからこそ、馬子は巨大木造建築を擁したわが国初の本格伽藍の飛鳥寺建立のゴーストを出すことになったのであろうと記した。わが国の見習い工人たちが百済の工人のもとに弟子入りしたことを伝える文献史料は何もない。しかし、用明二年に巨大建築の建立と金銅の丈六仏の制作を決意したということは、それまでにわが国の工人が養成されていなければならず、それなら敏達六年に渡来した百済の造寺工と造仏工のもとに見習い工人たちが弟子入りしていたというのが私の想定である。

敏達六年当時、百済の造寺工と造仏工に弟子入りした日本人の見習い工の人数を伝えるものはもちろんない。しかし造寺工や造仏工のそれぞれに、一人か二人のいわば小人数の見習い工しか弟子入りしなかったとも思えない。というのも、彩色鮮やかな巨大木造建築と金色燦然と輝やく金銅丈六仏というものを当時の日本人は誰一人見たことがなかった。つまり建築も仏像も未知なる文化であった。そのような状況で未知なる文化をつくり出すためには、それぞれの技術や技法を習得した工人をできるだけ多く必要としたはずだからである。私は、百済の造寺工と造仏工のそれぞれに弟子入りした見習い工人は少なくとも十人以上はいて、彼等は生産的な職能集団の若者の中から選ばれたと考えている。

そこで仏教寺院建立のためのわが国の工人がどのようにに技術や技法を習得して、飛鳥寺発願までに至ったかについて検討したい。私

はかつて、飛鳥時代を代表する仏師となった鞍作鳥の造仏技法の習得について論じたことがあるので、以下では造寺工の技術習得について述べてみたい。

さて、六世紀ごろのわが国の建築は銅鐸に描かれたものを見るかぎり、掘立柱式の小さくて軽い、しかも単純な構造の建物がほとんどであった。中には出雲大社のように高さが二十メートル以上もあって、古代においては比類なきものも建てられていたらしいが、これは例外で、一般の建物は小規模の掘立柱式であった。このような建築関係者の中から、未知の建築であった仏教建築の技法を習得できる若い見習い工人が選ばれ、敏達六年に来日した百済の造寺工のもとに送りこまれたのであろう。来たるべき本格伽藍の造営にそなえたわが国の見習い工人の技術の習得がはじまったのである。いうまでもなく、造仏工の場合も同じで、百済の造仏工に弟子入りした見習い工人の中に後年飛鳥時代を代表する仏師となった鞍作鳥がいたのである。

わが国の見習い工人たちが技術の習得をした造寺工房や造仏工房がどこにあったかはもちろんわからない。百済の工人たちが来日当初滞在していた難波の大別王の寺の中にあつた可能性もあるが、六世紀後半の政権の近くとすると飛鳥地方に置かれていたということになろうか。

百済の工人から習得した仏教建築はもともと百済の建築ではなく、中国伝統の木造建築であった。ということは金色に輝くブロンズ像

の場合も同じで、もとをただせば仏教とともに受容された文化はすべて中国のものであった。⁽⁷⁾百済の造寺工はかつて自分たちの先輩たちが中国から習得した仏教建築の技法を、今度は日本人に教授することになったのである。

仏教建築は飛鳥人の誰一人見たことのなかった色鮮やかな巨大木造建築であった。現代の鉄筋コンクリートに匹敵する強度の版築工法で基壇を造成し、柱をうける礎石を据えた。その上に大きな柱を立て、柱の上には斗拱をおき、さらに梁・桁を架け、瓦を葺いた大屋根をのせた。壁は白の漆喰壁とし、緑色の連子窓をつくり、柱をはじめとする主要部材はほとんどが朱色に、また垂木の先端は黄色に塗り、扉の金具や仏塔の相輪部の金具等はいずれも金鍍金に仕上げられ、土間には瓦と同じ材質の埴が敷かれていた。

百済の造寺工が巨大な仏教建築の技法や工法について、一度も眼にしたことのないわが見習い工人に教授するには、まず仏教建築がいかなる姿かたちをしているのかを示さなければなるまい。おそろしく金堂をはじめ仏塔や中門・回廊等の仏教建築のスケッチが示されたとと思われるが、百済の造寺工が自ら描いたか、それとも百済から持参したものが使われたのであろう。またスケッチと同種のものに「様」というものがあつた。稲木吉一氏によると日本訓みは「ためし」であるから、「様」は「かた」の意味で、設計図あるいは下絵(図)を示すことが多いといふ。⁽⁸⁾ 仏教建築は巨大木造建築であると再三述べてきたが、建築は大きくなればなるほどより精密さが要求

される。したがって、部材を加工して組立てるにはどうしても設計図が必要なのである。

ところで、仏教建築の姿かたちを理解する上でもっとも有効なのは模型であろう。「元興寺縁起」には戊申の年(崇峻元年・五八八)に百済からわが国に、「六口の僧、名は令照律師・弟子惠念、令威法師・弟子惠勲、道嚴法師・弟子令契、及び恩率首真等四口の工人並びに金堂の本様を送り奉りき」と記されている。ここに書かれている金堂の本様が何なのか、従来設計図説と模型説が唱えられてきたが、それぞれ確たる根拠があるわけではなかった。先の稲木氏によると、設計図的な制作下図と解すべきだといふ。私も稲木説に異論はないが、醍醐寺本の「元興寺縁起」は誤字脱字が多いため、「本」がもしも「木」の誤写であるなら「木様」は模型のこととなる。もっとも私は、「元興寺縁起」の文字が「本」であつても、その場合は金堂の設計図となるが、設計図のほかに各種の模型が百済から日本へ必ずや運ばれていたと考えている。

なぜなら、仏教建築の姿かたちを知るためにはスケッチでも可能だが、立体的な模型があればより一層理解ははやすい。また模型があれば姿かたちだけでなく、仏教建築の技法も習得しやすいからである。仏教建築を代表する金堂や仏塔の模型なら三十分の一以上の縮尺のものだったと思われるが、このような模型が百済から運ばれば、わが国の見習い工人の技術習得に役立てたのであろう。

吉村愴氏によると、百済は半島の高句麗・新羅との外交・軍事上

から日本の強力な軍事力をひき出す必要があり、そのために国策上わが国に仏教文化の供与を實行したのだという。⁽⁹⁾『日本書紀』によると欽明十三年の仏教公伝以来、敏達六年の僧尼・工人の献上、崇峻元年の僧侶と工人の献上等、あたかも百済はわが国において仏教興隆を意図しているかのようである。おそらく百済はわが国が仏教文化国となることを望んだのであり、そのためには一日もはやく本格的な仏教寺院の建立が実現することを願ったからであろう。それ故、私は敏達六年の百済が献上してきた造寺工と造仏工はわが国にも本格的な伽藍を出現させるために、その造営事業に従事できるような日本人工人を養成することが目的だったと解釈している。百済によるわが国への仏教公伝は吉村氏によると仏教文化の供与だという。すると敏達六年の造寺工と造仏工の献上はわが国への技術供与であり、仏教をわが国へ公伝した百済がどうしても履行しなければならぬアフターケアであった。

造寺工の献上が百済のわが国に対する仏教文化の供与である以上、仏教建築の各種模型や設計図、さらに仏教建築の内部や外観を描いたスケッチの類いを前もって用意することは仏教公伝を實行した百済の義務といえた。百済の造寺工はこのような視覚的な教材のほか、たとえばノコギリ・チョウナ・ヤリガンナ・ノミのような大工道具や、曲尺・墨壺・水ばかり・下げ振りのごとき精密器等も携えて来日したのである。

それではいよいよ百済の造寺工が日本の見習い工人たちにまだ見

たことのない仏教建築の意匠や技法、工法を教えることになるが、これはなかなか難儀なことであつたと思われる。このようなとき、もつとも効果的なのが先述の視覚的に教授することであろう。そこで百済の造寺工は百済から持参した仏教建築の模型やスケッチを通して、仏教建築のかたちや構造を教え、仏教建築がいかに巨大であるか、また巨大ゆえにどのような工夫がなされているかを理解させたいと思われる。仏教建築はそれまでのわが国の建物とは比較にならないほど大きく、同時に多くの部材を必要とした。見習い工人たちはこの部材を加工するための大工道具の扱い方を学ぶと、次はその道具を使つて実物大の部材をつくることを教えられた。というのも、模型やスケッチは仏教建築の意匠や大きさを知ることではできても、種々の部材が出会う部分、つまり構造的に複雑で重要な部分はいくら見ても見るだけでは理解できないからである。それまでのわが国の建物は構造的に単純なものであつたが、仏教建築は重量のある大屋根を支えなければならなかったために、数多くの工夫をしている。まず瓦を葺いた大屋根の重量は多くの垂木で支えられ、そのあと順次、出桁、尾垂木、力肘木、斗拱、柱へと伝わる。また斗拱は屋根の重みがかかる桁や力肘木などの横材をしつかり支え、上からの力を柱に伝える構造上重要な働きをしている。このような各部材を実物大でつくつてこそ、見習い工人たちは未知の仏教建築の構造を理解できるのである。つまり、新しい建築技法や工法を習得するには、なによりも実物大の部材をつくつてみるのが肝心なのである。

それ故、百済の造寺工はわが見習い工人たちに仏教建築の各部材の役目を効率的に説明するため、それらを実物大でつくらせ、さらに組立てながら構造的な仕組を理解させたと思像される。

もつとも実物大の部材をすべてつくったわけではない。なぜなら、建築の場合実物大の部材をすべてつくって組立てると、一つの建築が出現することになるが、もはやこれは技法や工法の習得ではなく、一つの建築の建立になるからである。したがって、見習い工人たちの技術習得期間中にはすべての部材を実物大でつくるのではなく、実際の建築の一部分だけ、たとえば構造的にもつとも複雑かつ重要な建築の四隅の一箇所だけの部材をつくって組立てるような方法がとられたのであろう。私はこれだけでも、仏教建築が如何なるものであるのかを理解するには大いに効果があったと考えている。

実物大の部材をつくるためには、実物大の模型があればもつともつくりやすい。すると百済の造寺工の来日時に、模型やスケッチ・設計図とともに、一度百済で組立てられていた仏教建築の四隅の部分などが解体され、部材は日本に運ばれていたのではあるまいか。百済から日本への輸送は、船を使うかぎり大きさや重さはあまり問題にはならない。水があるところなら、海でも川でも船ほど容易に物資を運ぶものはないからである。私は百済の仏教建築の四隅の部分解体した部材をも、実物大の、つまり一分の一の模型と呼びたいが、このような模型が見習い工たちの技術習得にはもつとも利用価値があったと思われる。

百済の造寺工が来日したのが敏達六年で、その後わが国の見習い工人たちが仏教建築の技法や工法の習得につとめたが、どれほどの期間でマスターできたかは残念ながらわからない。しかし用明二年にはわが国初の本格伽藍の飛鳥寺が発願されているから、それまでにはわが見習い工人たちも一人前の工人に成長していたのであろう。もつとも、見習い工人たちの養成期間中のことではあるが、彼等と師匠の造寺工の合作ではないかと思われるのが、『日本書紀』や『元興寺縁起』に書かれている。すでに述べたように、いずれも馬子が建てたもので、敏達十三年の宅の東の仏殿と石川の宅の仏殿、さらに敏達十四年の大野丘の北の塔の三箇所の仏教施設である。以上の仏教施設が立っていた場所はもちろん確認されておらず、当然ながら如何なる建築が立っていたのかもわからない。しかし仏殿と殿の文字を使っているところからすると、この建物は中国建築、つまりは仏教建築であった可能性が強い。また塔はいうまでもなく仏塔のことで、『元興寺縁起』は刹柱という仏塔独自の部材名を記していることを思えば、大野丘の北の塔は刹という心柱が通った中国創案の木造仏寺建築の形式を踏襲していたことはまちがいあるまい。こうしてみると、百済の造寺工に弟子入りしたわが見習い工人たちはおよそ十年の間に、師匠から仏教建築の技法を習得しつつ、三箇所の仏教施設を師匠とともにつくり、本格伽藍の造営にそなえていたのである。

記す『日本書紀』・『元興寺縁起』・露盤銘の三種の史料の中では『日本書紀』がもっともくわしく書かれている。すなわち寺工二人・鑪盤博士一人・瓦博士四人・画工二人の四種八人の工人が渡来したという。『元興寺縁起』は「四口の工人、並びに金堂の本様を送り奉^{なま}上りき」とあつて、如何なる種類の工人が渡来したのかわからないが、従来四口の工人は四人ではなく、『日本書紀』の四種の工人に対応させて、寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工の四種の工人のことといわれてきた。⁽¹⁾また露盤銘は鑪盤師一人・寺師二人・瓦師四人と三種七人の工人の渡来を記すが、画工の名はない。露盤銘には工人の渡来を記したあと、ややはなれて「書人百加博士、陽古博士」の名がみえる。『日本書紀』の画(畫)工白加と較べると、書と畫、百加と白加は互いに似ている。この露盤銘は誤字脱字の多い『元興寺縁起』に引用されたものであることを思えば、書は畫、百加は白加の可能性もあろう。すると露盤銘にはもともと渡来工人がもう一種、つまり画工がいたのではなからうか。何度か書写を繰り返すうちに錯綜がおこり、第四の工人画工の画(畫)は書、白加は百加となり、渡来工人は三種となり書人がはなれておさまりの悪いところに書かれたのであろう。

おそらく飛鳥寺の建立のために崇峻元年に百済から渡来した工人は建築関係ばかりで、すでに来日していた造寺工のほかに今回はあらたに鑪盤博士・瓦博士・画工の三種の工人が加わったのであろう。三種の工人は飛鳥寺の発願後來日しているところをみると、その

ころ来日して日本人の見習い工に技術を教えても、飛鳥寺の造営に間に合ったということであろう。

このように、飛鳥寺造営集団には崇峻元年に来日した百済の建築関係の工人があらたに参加し、日本人工人を指導することになったのである。

むすび

飛鳥寺発願の経緯については、まず用明二年に馬子が政敵守屋を滅ぼしたことによって、馬子の政治に反対する勢力がなくなり、かねてよりすすめていた仏法興隆を一举に進展させるべく、そのシンボルたる本格伽藍の造営を発願したのである。さらにいえば、百済がわが国の仏法興隆を期待して敏達六年に送ってきた造寺工と造仏工のもとで育成されていたわが国の見習い工人たちが十年という歳月を経て、用明二年のころやっと一人前の造寺工と造仏工に成長していたため、馬子は本格伽藍建立のゴーサインを出したのである。

このとき造仏工の第一人者に浮上していたのが鞍作鳥であるが、彩色鮮やかな巨大木造建築は造寺工という工人だけでは足りず、飛鳥寺が発願されると百済はさらに鑪盤博士・瓦博士・画工という建築関係の工人を送ってきた。彼等は飛鳥寺造営集団の造堂塔グループに加わって、日本人工人を育成したのである。

飛鳥寺はまず仏塔の建立からはじまっているが、露盤銘には造営

それ故、百済の造寺工はわが見習い工人たちに仏教建築の各部材の役目を効率的に説明するため、それらを実物大でつくらせ、さらに組立てながら構造的な仕組を理解させたと思像される。

もつとも実物大の部材をすべてつくったわけではない。なぜなら、建築の場合実物大の部材をすべてつくって組立てると、一つの建築が出現することになるが、もはやこれは技法や工法の習得ではなく、一つの建築の建立になるからである。したがって、見習い工人たちの技術習得期間中にはすべての部材を実物大でつくるのではなく、実際の建築の一部分だけ、たとえば構造的にもつとも複雑かつ重要な建築の四隅の一箇所だけの部材をつくって組立てるような方法がとられたのであろう。私はこれだけでも、仏教建築が如何なるものであるのかを理解するには大いに効果があったと考えている。

実物大の部材をつくるためには、実物大の模型があればもつともつくりやすい。すると百済の造寺工の来日時に、模型やスケッチ・設計図とともに、一度百済で組立てられていた仏教建築の四隅の部分などが解体され、部材は日本に運ばれていたのではあるまいか。百済から日本への輸送は、船を使うかぎり大きさや重さはあまり問題にはならない。水があるところなら、海でも川でも船ほど容易に物資を運ぶものはないからである。私は百済の仏教建築の四隅の部分解体した部材をも、実物大の、つまり一分の一の模型と呼びたいが、このような模型が見習い工たちの技術習得にはもつとも利用価値があったと思われる。

百済の造寺工が来日したのが敏達六年で、その後わが国の見習い工人たちが仏教建築の技法や工法の習得につとめたが、どれほどの期間でマスターできたかは残念ながらわからない。しかし用明二年にはわが国初の本格伽藍の飛鳥寺が発願されているから、それまでにはわが見習い工人たちも一人前の工人に成長していたのであろう。もつとも、見習い工人たちの養成期間中のことではあるが、彼等と師匠の造寺工の合作ではないかと思われものが『日本書紀』や『元興寺縁起』に書かれている。すでに述べたように、いずれも馬子が建てたもので、敏達十三年の宅の東の仏殿と石川の宅の仏殿、さらに敏達十四年の大野丘の北の塔の三箇所は仏教施設である。以上の仏教施設が立っていた場所はもちろん確認されておらず、当然ながら如何なる建築が立っていたのかもわからない。しかし仏殿と殿の文字を使っているところからすると、この建物は中国建築、つまりは仏教建築であった可能性が強い。また塔はいうまでもなく仏塔のことで、『元興寺縁起』は刹柱という仏塔独自の部材名を記していることを思えば、大野丘の北の塔は刹という心柱が通った中国創案の木造仏寺建築の形式を踏襲していたことはまちがいあるまい。こうしてみると、百済の造寺工に弟子入りしたわが見習い工人たちはおよそ十年の間に、師匠から仏教建築の技法を習得しつつ、三箇所の仏教施設を師匠とともにつくり、本格伽藍の造営にそなえていたのである。

五、飛鳥寺造営集団

飛鳥寺が発願された用明二年（五八七）について、先ほど私は、敏達六年（五七七）に來日した百済の造寺工のもとに弟子入りしていた見習い工人たちが、この用明二年のころそれぞれの技術・技法を習得して一人前の造寺工と造仏工に成長していたからこそ、馬子はわが国初の本格伽藍造営のゴースインを出すことになったのであろうと記した。もちろんそのことを伝える文献は何もない。しかし私は、『日本書紀』の敏達六年の工人の來日と用明二年の飛鳥寺の発願という二つの記事から、そのようであつたと確信している。

およそ十年の歳月を費して、わが見習い工人たちは一人前の造寺工へと養成されたのである。仏教公伝以來およそ五十年、わが国にも仏教文化の拠点たる本格伽藍を造営することのできる工人集団が誕生したことになる。私はこれを飛鳥寺造営集団と呼びたい。

この飛鳥寺造営集団は堂塔の建立を担当する造寺工を中心とした造堂塔グループと、本尊の金銅仏を制作する造仏工の造仏グループからなっていた。おそらく巨大木造建築を建てる造堂塔グループが人数も多く、組織も大きかったと思われる。というのも、建築の場合、杣取りした木材を乾燥し、木づくりをして各種部材に仕上げ、順次組立てていく。これが造寺工の主たる任務であろうが、現実にはまず用地を測量し、図面通りにどこに何を建てるか決めなければ

ならない。用地内に堂塔の建つ地点が決定すると、地山面まで掘り下げ版築工法によって強固な基壇を造成する。また採石場から礎石にする石を切り出し、柱をうけるように加工して基壇上の所定の地点に据える。ここまでの工程が終らないと、木づくりされた柱は立たないし、梁も桁も架けることはできないのである。このように、百済の造寺工は木づくりや架構以外にも測量の技術や版築の工法、礎石の加工、さらに漆喰壁の造法等を、見習い工人たちに教授していたのであろう。こうした種々の技術を習得していた造寺工がいたはずだから、造営塔グループの方が人数も多く、組織も大きくなったのである。このような日本人造寺工を統率していたのが百済の造寺工ということになる。

一方、造仏グループでは仏師として鞍作鳥の名はあまりに有名である。私は、鞍作鳥こそ敏達六年ごろから百済の造仏工のもとで見習い工人として学び、およそ十年の間に金銅仏の造像技法を習得していちはやく頭角をあらわした人物であつたと推測している。¹⁰ 鞍作鳥が習得した金銅仏の制作は、小さなものであれば造仏工は一人で中型や原形・外型をつくり、さらに鑄込までも一人でおこなつたと思われる。もつともそれを手伝う補助員の手元がいたことはいうまでもないが、原則一人の造仏工が小金銅仏ならつくることはできた。しかし仏像制作が小からしだいに大きくなって等身へとすすみ、あるいは小でも数量が増えると、一人の造仏工とその手元だけでは仏像の制作は維持できなくなる。そのような段階、つまり見習い工人

が一人前になるころに分業がおこるのである。すなわち、塋土で原形をつくる造形部門と鑄込を担当する鑄造部門の大きく二つに分れ、ヘリーダー的造仏工→造形担当造仏工・鑄造担当造仏工→手元」という職制が生まれていたであろう。飛鳥寺の発願を迎えるころ、百済の造仏工のもつて学んでいた見習い工人の中からヘリーダーとなる鞍作鳥が浮上したが、彼は百済の造仏工の代理をつとめる造仏工であり、金銅仏制作の造形部門と鑄造部門の双方に長じていたのである。

飛鳥寺が発願された用明二年の時点で、わが国には本格伽藍を造営するための工人がすでに養成されていた。ところが、先述したように飛鳥寺建立のために百済から再度工人を招聘しているのである。『日本書紀』・『元興寺縁起』・露盤銘はいずれも飛鳥寺建立のために百済から工人が渡来したことを記している。工人の職種と人数をみると、『日本書紀』は寺工二人、鑪盤博士一人、瓦博士四人、画工一人の四種八人の工人の渡来を伝え、露盤銘は鑪盤師一人、寺師二人、瓦師四人の三種七人の工人を記したあとに、書人百加博士・陽古博士の名を書き加えている。また『元興寺縁起』は四口の工人と金堂の本様が送られてきたことを記している。それぞれの史料の伝えるところが一致しないことについては後述するが、寺工と寺師は造寺工のこと、鑪盤博士と鑪盤師は仏塔の上の水煙や利管・九輪などの金属製部分をつくる工人で、瓦博士と瓦師は瓦職人、画工は仏堂内の天井に蓮華や唐草の文様を描いたり柱や梁を塗装した工人と

思われる。いずれも建築関係の工人ばかりで、仏像関係の工人がいないのは注目すべきである。

造仏工が招聘されなかったのは、いうまでもなく飛鳥寺発願の時点で、本格伽藍の丈六本尊の金銅仏の制作に応じる技術をもった造仏工がわが国にいたからにはかならない。その造仏工の名は鞍作鳥である。それでは飛鳥寺発願の時点で一人前の造寺工はいなかったのかというと、けつしてそうではない。先ほどより述べているように、造寺工も造仏工も一人前に成長していたのである。しかしそれでも建築関係の工人をあらたに招聘しなければならなかったところにその特殊性があつた。まず、仏教建築が巨大木造建築でブロンズ像の制作よりも桁違いに大規模な工事であつたため、専門技術を身につけていた造寺工を何人でも必要としたからであろう。現に敏達六年の造寺工は一人であつたが、飛鳥寺建立のために来日した造寺工は二人であつた。それだけ建築の方が指導的なスタッフを必要としたのである。また仏教建築は屋根に瓦を葺き、仏塔の上には九輪や水煙のような金属製部品をつけ、堂内の柱や梁には彩色を施こし、天井には鮮やかな文様が描かれているため、造寺工だけではとうていつくることはできない。『日本書紀』によると、飛鳥寺建立のために寺工（造寺工）のほか鑪盤博士一人、瓦博士四人、画工一人が来日しているのはそのため、建築関係はそれだけ専門工人を必要としたのである。

ところで、飛鳥寺の発願に際して百済から渡来した工人について

記す『日本書紀』・『元興寺縁起』・露盤銘の三種の史料の中では『日本書紀』がもつともくわしく書かれている。すなわち寺工二

人・鑑盤博士一人・瓦博士四人・画工一人の四種八人の工人が渡来したという。『元興寺縁起』は「四口の工人、並びに金堂の本様を送り奉^{たま}りき」とあって、如何なる種類の工人が渡来したのかわからないが、従来四口の工人は四人ではなく、『日本書紀』の四種の工人に対応させて、寺工・鑑盤博士・瓦博士・画工の四種の工人のことといわれてきた⁽¹⁾。また露盤銘は鏤盤師一人・寺師二人・瓦師四人と三種七人の工人の渡来を記すが、画工の名はない。露盤銘には工人の渡来を記したあと、ややはなれて「書人百加博士、陽古博士」の名がみえる。『日本書紀』の画(畫)工白加と較べると、書と畫、百加と白加は互いに似ている。この露盤銘は誤字脱字の多い『元興寺縁起』に引用されたものであることを思えば、書は畫、百加は白加の可能性もあろう。すると露盤銘にはもともと渡来工人がもう一種、つまり画工がいたのではなからうか。何度か書写を繰り返すうちに錯綜がおこり、第四の工人画工の画(畫)は書、白加は百加となり、渡来工人は三種となり書人がはなれておさまりの悪いところに書かれたのであろう。

おそらく飛鳥寺の建立のために崇峻元年に百済から渡来した工人は建築関係ばかりで、すでに来日していた造寺工のほかに今回はあらたに鑑盤博士・瓦博士・画工の三種の工人が加わったのであろう。三種の工人は飛鳥寺の発願後に来日しているところをみると、その

ころ来日して日本人の見習い工に技術を教えても、飛鳥寺の造営には間に合ったということであろう。

このように、飛鳥寺造営集団には崇峻元年に来日した百済の建築関係の工人があらたに参加し、日本人工人を指導することになったのである。

むすび

飛鳥寺発願の経緯については、まず用明二年に馬子が政敵守屋を滅ぼしたことによって、馬子の政治に反対する勢力がなくなり、かねてよりすすめていた仏法興隆を一挙に進展させるべく、そのシンボルたる本格伽藍の造営を発願したのである。さらにいえば、百済がわが国の仏法興隆を期待して敏達六年に送ってきた造寺工と造仏工のもとで育成されていたわが国の見習い工人たちが十年という歳月を経て、用明二年のころやつと一人前の造寺工と造仏工に成長していたため、馬子は本格伽藍建立のゴーサインを出したのである。

このとき造仏工の第一人者に浮上していたのが鞍作鳥であるが、彩色鮮やかな巨大木造建築は造寺工という工人だけでは足りず、飛鳥寺が発願されると百済はさらに鑑盤博士・瓦博士・画工という建築関係の工人を送ってきた。彼等は飛鳥寺造営集団の造堂塔グループに加わって、日本人工人を育成したのである。

飛鳥寺はまず仏塔の建立からはじまっているが、露盤銘には造営

担当者の名が書かれている。すなわち、仏塔建立の総責任者として山東漢大費直麻高垢鬼・意等加斯費直、その下の現場監督者として意奴弥首辰星・阿沙都麻首未沙乃・鞍部首加羅爾・山西首都鬼、さらにその下に多くの手元（諸手）が控えていたようである。

註

- (1) 拙稿「飛鳥寺の創立に関する問題」(『仏教芸術』一〇七・昭和五十一年)。
- (2) 福山敏男「飛鳥寺の創立に関する研究」(『史学雑誌』四五—一〇・昭和九年十月)。
- (3) 文化財保護委員会「四天王寺」吉川弘文館・昭和四十二年。
- (4) 諸橋徹次「大漢和辞典」巻四の「寺」・大修館書店・昭和三十二年。
- (5) 福山敏男氏は「桜井寺」の称は縁起作者が机上で造り出した名で、信じられないという。もともと福山氏は「元興寺縁起」と「日本書紀」のテキストクリティックを徹底的におこない、飛鳥寺発願前後にかかわる二つの史料の記述の多くを構作あるいは潤色とされた。つまり、福山氏によると二つの史料に書かれていることはことごとく信用できないということになるが、私は福山氏のいわれるような理由だけではそれほど否定はできないのではないかと考えている。これについては稿をあらためて述べてみたい。
- 福山「豊浦寺の創立に関する研究」(『史学雑誌』四六—一二・昭和十年十二月)、福山前掲論文(註1参照)。
- (6) 拙稿「鞍作鳥の造仏技法の習得について」(高崑正人先生古稀祝賀論文集 日本古代史考)所収・平成六年三月)。
- (7) わが飛鳥人は仏教文化を百済から供与されながらも、もともと百済のものではなく中国のものであることにいちちやく気付いていた。というのも、わが国初の本格伽藍の飛鳥寺を造営中の推古朝にはやくも隋に使を送り、

中国文化の直接摂取をはじめているからである。以後わが国は一貫して中国文化を直接に受容しつづけ、天平時代には中国仏教美術に追い付き、追い越すのである。追い付いた記念すべき作品が薬師寺金堂の薬師三尊であり、追い越したものとして誇らしげにつくられたのが東大寺大仏である。とはいってもない。

- (8) 稲木吉一「上代造形史における『様』の考察」(『仏教芸術』一七一・昭和六十二年)。
- (9) 吉村怜「日本早期仏教像における梁・百済様式の影響」(『仏教芸術』二〇一・平成四年)。
- (10) 前掲拙稿(註6参照)。
- (11) 日本古典文学大系「日本書紀 下」の一六八頁の頭註一四・岩波書店・昭和四十年。

(一九九六年九月三十日稿)